

の一行を呆れて見ている。こうなるとやけくそである。何か別の力が授かったように生徒も走ってゆく。道路の最後の曲り角を曲がると駅のホームが見えて来た。汽車は正に発車しようとして駅長が時計を見ている。「待ってくれー」と大声をあげたら駅長が気づき、発車を待ってくれたので、一同は切符を買う暇もなく最後尾の箱に飛び乗り、座席にヘタリこむと同時に動き出した。「これで学校に間に合う」。先生の言葉を最後にそのまま一同は死んだようになって眠りこけた。

この話はじねんじょが出来る遙か前の事で、こんな事が後に入会の際の試験問題の一つだなどとまことしやかに語り伝えられたのかも知れない。

あれから40年、今ではじねんじょの採集旅行も全く近代化され、たまねぎの味噌漬けなどは誰もやらなくなり、共同装備もかなり充実したものとなって来た。山へ行くにもすべて自家用車に分乗して山麓まで横付けし、温泉地を通らなければ嫌だなどとささやかれる始末、まことに隔世の感がある。

若い人が少なく、平均年齢が1年毎に増してゆくじねんじょは、これからどのように歩いて行くのだろうか。

(何しろ40年まえの事であり、多少のフィクションはお許し下さい) (1990, Mar. 14)

## むかご第9巻1号(1992)pp.11~17に掲載(復刻)

### 杵差岳植物採集記

尾崎 富衛

(次の文章は昭和29年夏、池上先生をご案内して登った杵差岳の採集旅行について、昭和30年発行の「越後山岳」第5号に登載した文で、今回これを一部手直しし、再録したものである。

(記：尾崎 1993. 4. 1)

五年ほど前のことである。筆者が新潟県の山の元老藤島氏に「高山植物が豊富で経費のうんと安い山」と訊ねたら、言下に教えられたのが杵差岳であった。最初登ったのは昭和廿五年である。その時は鉄道から離れているので入りにくいように思ったが、以来五回の採集旅行を試みて、その度毎に此の山に益々無限の懐かしさを覚えてゆくのである。このように同じ山へ何回も登った事は、小生の山の経験では全くないことである。この山の何が一体こんなに人の心を引付けるのであろうか。一つは山の不便さが却って自然をそのまま保たせ、妄りに人の暴力を許さぬ為かも知れぬ。何はともあれ小生にとっては洵に忘れ難い山で、紹介して下さった藤島氏並に山で御指導を賜った県立南高校の池上義信先生の御厚志に対して敬意を表するものである。

#### 大熊小屋迄

岩船郡関川村の南、最奥の部落大石の村外れの観音堂が筆者の毎度御厄介になる休息所である。ここで昼食をとり池上先生と二人で二時頃出発した。森を抜けると河岸段丘

が開け、それを過ぎると大石川本流に架かっている跳石の吊橋にかかる。ここ迄の植物は平凡であるが、橋の袂にキタゴヨウの二三本並んでいるのが目につき杵差へ来たなという感じを起させる。この木はこれからのコース中に、少数の杉林を除いて針葉樹の殆ど見当らない中であって、只一つの代表的な針葉樹といってよいからである。橋を渡って左岸に移ると僅かの杉林が続く。そして越後北部の山裾ではどこでもそうであるが、杵差も特にユキツバキが多く、この辺からすでに藪となっている。結実期には他所からも採集にきて、俄に何俵もかついで行く事もあるそうだ。間もなく東俣川の出合いが対岸に見られる頃、滝倉沢にかかるコンクリートの小橋を渡る。ここまでの代表的な植物を挙げるとヤマブドウ、アケビ、モミジイチゴ、ユキツバキ、コナラ、ホツツジ、ケトチノキ、ウワミズザクラ、ウリハダカエデ、ムシカリ等がある。沢の対岸を登ると足下には、イワナシやオオイワカガミが艶のある葉をつけている。路の傍の崖には、初夏にはサイゴクミツバツツジがあり、盛夏にはオオコメツツジが咲いているし、水の滴り落ちる崖にはキンコウカが根を張って金色の光を放っている。次々と小沢を越えたり、段丘を通過したり、崖を搦んだりして路は山腹を縫ってゆく。やがてイズクチ沢にかかる。採集者にとってはこうした深い沢の登り降り急崖となっているのでかなりきつい。風化の進んだ花崗岩がずっと露出しており、軟いのでひやひやする。喘ぎながら登りつめると落雷で枯れたらしいキタゴヨウの幹が四五本どこからも目につきやすいように立っている。この五葉ノ峰から初めて杵差本峰が指呼の間に姿を現してくる。そこを下るとブナの原始林が始まってくる。落葉を踏んで歩くブナ林の静けさは何ともいえない。十貫平のブナ林に幾つかの

支沢を過ぎ、対岸が次第に迫ってくるころゼガク沢の杖差金山に着いた。ブナ、トチ、ナラが多く豊富な天然林が眠っている。この鉾山で小休止、約一時間で右岸へ渡ると大熊小屋で、今日一日の行程を終る。我々は採集があり倍も時間が掛り、金山ではもう日が暮れて、本流を渡るには暗闇の中を懐中電灯を頼りにやっと渡渉したのであった。毎年架設する丸太橋は増水の度に押し流されて跡形もなかったのである。大熊小屋は関谷村長の肝煎りだけあって頼母しくがっしりした造作で、どんな豪雪にもびくともしないであろう。自然環境もなかなかよく、月光を仰いで仏法僧(コノハズク)の鳴き声を楽しむのもまた一興である。動物はリス、サル、蛇類、特に蝮が相当いる。鳥類はトラツグミ、ヨタカ、ウグイス、ホホジロその他多くの種類がいる。春秋にはゼンマイ、キノコ類の宝庫であり、岩魚釣りにも適している。筆者は岩魚釣りや舞茸取りの爺さんと小雨降る窓外を見乍ら語った事をよく思い出す。今日は宿を定め、いろいろで飯盒をたき、荷物を整理して眠りについた。

新六ノ避難小屋まで 翌朝、天気は晴れているが雲の去来が怪しげである。小屋のまわりを見渡すと切り払われた後にヨモギ、ワラビ、ススキ、オオノアザミ等が繁茂している。小屋の裏はブナとミズナラの大原始林の下にユキツバキが密生して何処までも続き静寂そのものである。大熊平のブナ林の中の径は大熊沢へ下っている。この渡渉は水量さえ少なければ飛石伝えにゆける。登るとまたブナ林である。踏締める落葉が心地よい伴奏をかなでて山行く人の心をいやが上にも湧き立たせる。又四郎道の登り口の指導標からいよいよ登りにかかる。この径はよく踏まれており、危なげもなく迷うところもない。登り口はブナが主であるが蘚苔類が多くついていて恰好な採集地である。また処々ギンリョウソウが透き通った白い無気味な姿を枯葉の間からのぞかせている。

登るに従って視界が開け、大熊沢の全景が脚下になり、林相も次第に変化して喬木が多くなり、灌木の種類も増してくる。カエデ類、コシアブラ、イモノキ、ケナシヤブデマリ、シナノキ、タムシバ等は下にもあるが、ここでもよく目につく。国有林とはいふものの対岸を見渡しても樹の生え方が貧弱なようで、この大熊尾根の方が豊かな林相をしている。

標高七・八百メートル辺でキタゴヨウの林が現れてきた。この尾根は鉾立沢側が緩傾斜で大熊沢側が鋭く落ちていく。そうした地形にキタゴヨウが生えるのだから自然鉾立沢寄りに樹木が繁茂してくる。飯豊山系には一帯に杉が少ないがキタゴヨウがその代りをしてくれるのかも知れぬ。針葉樹林帯が植物の垂直分布の一要素であることは常識だが、ここではキタゴヨウによって代表されている。この木の松球は大きく長くて何かユーモラスな感じである。歩く足下に幾らもごろごろして、中の種子はリスが食って

しまらしい。又この松葉は細かくてしっとりしていて踏みしめると弾力があって歩き易く洵に感じがよいが、降りる時はよく滑る。続くブナ林の尾根を尚も登り続けると中腹の辺りであろうか、小さな流れに出る。

流れの上が汚いので谷間へ少し下るとよい水場があった。口付けて貪り飲み、やれやれと一息つき、ふと水中を見ると何か動く妙な虫がいる。注意して見ればトンボのヤゴ、それもアカトンボらしい。水が少ないので半分体を水からはみ出し乍ら動いている。こんな小さな流れにも生命の躍動があるのかなあと見惚れていると、先生に「何か居ましたかね」と肩をポンと叩かれた。

この辺はタムシバが多く、ウツギ、コシジシモツケ、トリアシショウマ、アイバソウ、ムシカリ、ツシマナナカマド等夏見では平凡な灌木類だが残雪期には白色の美花で彩られることであろう。尚北越でコブシと称している花はタムシバのことである事が多い。採集者は歩く度に銅乱やザックの中がふくれてきて、頂上に着く頃にはぎゅうぎゅうになってしまうので甚だ割に合わない。しかも歩行はのろのろ同じ所に必要によっては二三十分も立止って同行者などお構いなしに仕事をする。始めは多少の興味と同情をもって待ってくれるが、直ちに飽きてさっさと先に行ってしまう。こちらもそうして貰わないと気苦労でやり切れない。などなど先生と二人で笑いながら登り続ける。左の崖から少し径は離れて林の中へ入ってゆく。足元の下草を注意してゆくと、緑色の匙形の葉が群がっているロゼットの中央から出ている茎の先に、黒紫色の宝石のような玉を幾つもつけているのがツバメオモトで、此の花は雪消えに咲く。ソテツに似た葉を出している羊歯はヤマソテツで、これは下界の植物であるが、頂上附近の藪迄進出している珍しい変りものである。ツルアリドオシの赤い実はどんなに小さくともその可憐さから直ちに目につく。

エゾユズリハは正月に飾るユズリハの親類であるが、この辺のものは葉柄の色がずっと薄い。シナノキはボダイジュの仲間であるが雪の為に木がいじけて葉も小さい。ホツツジは桃色の花が枝の先に箒形をして集って開くので普通のツツジと大分趣を異にしている。表土が崩れて木の生えない場所にはセンジュガンピの白い花が花屋によくあるムギナデシコのような可憐な風情で咲いていたが、割合他の山には無い珍しいものである。シロバナヘビイチゴという長い名前の苺は北地の何処の高山へ行ってもガレ場に細長い赤色の蔓を伸しているものだが、この赤い実は山登りの珍味で、喉のかわいた時など口一杯にほおばるとオレンジゴをもっと淡泊にしたような味で、何ともいえぬ風味があって美味しい。日当りから小蔭の所にエゾシオガマの淡紫色と黄色の花が5、60センチの茎の先に面白い形をして咲いている。タテヤマウツボグサの碧紫色の花が顔をみせるのもこの辺りで、高度千米位で出てくるのは一寸低過

ぎる位である。標高が低くとも高山植物が豊富なのも杵差岳の大きな特徴の一つである。登るに従って喬木は少なくなり、あるものは段々と矮性となってゆく。幾抱えもあった、ミズナラもこの辺へくると長く雪に押されているので妙にくにゃくにゃ曲って高さはやと二米位にしかならない。ナナカマドなども高山らしい姿態を見せてくる。その中に突起を一つ乗越して前面を見ると霧でよく分らぬが先がだらだら下っている。もう幾らもあるまいと下ってゆくと、又喬木帯がある。この喬木と灌木のある突起を越して急転直下とどんどん下ると急に明るくなった。

オオノガリヤスが一面に生えた鞍部状の小さな草原へ出たのであった。この草地は前に藤島氏によってカリヤス平という地名がつけられたが、この長い又四郎徑に唯一の変化を与えており、この草原には適切な呼称であると思った。猫額大の池塘の囲りは湿地になっていてイワイチョウ、カラマツソウ、モミジカラマツ、サンカヨウ等がナナカマド、ウラジロヨウラク、ウラジロハナヒリノキ等の下草として繁茂している。寝転んで休むには反対側の乾いた所を選べば又とない休息所となる。この辺は、高度約千二百米である。一息入れてから又雑木の間を縫いながら登ると、無いと思っていた喬木帯が三度現れたが、間もなく辺りは急に開けて灌木帯に入る。ツシマナナカマド、ミズナラ、ノリウツギ、ミヤマホツツジ、アカミノイヌツゲ、ミネカエデ等がその灌木帯を構成している。足下にはタカネアオヤギソウ、ヤマソテツ、マイズルソウ、コイチョウラン等も生えている。

標高約千三百米の此の地点へ来る迄に既に七時間を費やしている。洵に超鈍行である。普通ならば大熊小屋から二時間位であろう。霧は深いが降らないらしい。先生と二人で相変らずの笑い話をしながら、せっせと鶏が菜っ葉をついばむように、草や木の根を掘ったり枝を切ったりし乍らぶらぶら歩いて行く。誰とも行き交うこともなく実に天国そのものである。

尾根が痩せてきて、霧の間から鋒立沢が望まれるようになってきた。こうして歩いていると、越後の北部の山はどれも林相が似ているので、時々別な山を歩いているような錯覚を起させる。その中に杵差岳の頂上が微かに見えてきた。霧の間から見える前景というものは嫌に人を威圧する感じがするものだ。もう新六ノ池の小屋も間近いと解ると一層歩みはのろのろになる。岩の交わってきた尾根にはガンコウランが一面に敷かれ、ジャクナゲも、エソユズリハもある。キタゴヨウカハイマツか不明のものが丁度ハイマツの生態によく似た姿をしている。それにつれ高山植物もいろいろ現れてきて、こいつは止められないと夢中になってつついていると、雲行きが怪しくなって閉りは全然見えなくなった。一通り探し終えたので足元を見ないようにして進むと脚下に雪が見えて新六ノ池も現れ間もなく小屋に

到着した。大熊小屋の出発が七時、ここ着は時に三時半。

獲物を一山担いで小屋へ入ったところが、ブナの丸太が雪で折れて屋根は潰れて腐り、小屋の内部が半分も狭くなっている。天井からは空が見え到る処穴だらけなのでこれでは今夜は寒いぞと思いながら設営にかかる。陣竹の敷物も雨に滞れているので新しく草を刈って軟き、シートやビニールで漸く二人のねぐらを準備した。火を燃す間に池を一廻りして様子を見ると、あるわあるわ高山植物がその美を競っている。池の周囲にウラジロヨウラク、ムラサキヤシオツツジが茂り、水辺にはモウセンゴケがびっしり敷かれている。池は割に澄んでいるがサンショウウオのお玉杓子が沢山いる。池の上の雪の傍には一面ナンキンコザクラがその桃紫色のあでやかさを誰かに見てくれと、雪解け水の冷たさにも負けずに咲いていた。斜面には小さくとも驚くばかりに綺麗な花が目白押しに咲いている。コイワカガミ、チングルマ、ハクサンオオバコ、ツガザクラ、ウサギギク、アオノツガザクラ、タカネニガナ、ヒメノガリヤス等々。一通り観察して小屋へ戻るともう夕方である。携燃で飯を炊き簡単な夕食を済ませた。採集品を整理し、後片付けが終った七時過ぎ、霧がやや薄れて下界が少し見えて来た。新発田の灯らしい。

家で家内としきりに論争している夢をみていたことを考えるとキョウサイ会の会員の資格はあるらしい。その内に何だか冷たいものがポタポタ落ちてきたのを感じて家内が気の毒になって眼を覚したら、自分が気の毒な状態になって居るではないか。外は大雨で天井の穴や周囲の隙間から容赦なく吹き込んでくる雨に、こりゃいかんと二人は小屋の一番隅へあわてて避難した。避難小屋の中で避難する有様であるからもう安眠どころでなかった。夜明けを今か今かと待った二時間は長かった。五時近くになってやっと白み始めてきたが、全く小屋を信用して雨具が完全でなかったため、こうなっては全くあわれなものである。

朝食が終わるとすぐ、小止みもなく降り続く雨の中へ採集の鬼は出掛けて行かれた。筆者は小屋に残って前年の印象を思い出すのであった。

#### 杵差岳頂上（前年の思い出）

今日は素晴らしいお天気であるが飯豊本山だけ雲がかかっていた。陽射しは強いが微風が適当にこれを和らげてくれる。杵差岳頂上の辺りは正に百花燎乱、雲上の極楽浄土もかくやとばかりである。小生が登った高山の中でこんなに標高が低いのにこんなに種類が豊富で、色の鮮明なお花畑があったであろうか。やはり話に違わぬ宝庫であった。これも飯豊連峰の影響を多分に受けているのであろうが、とにかく理屈なしに素晴らしい。連れてきた高校生も鬼のように飛上って喜んでた。

紫を代表するものはミヤママツムシソウ、これと同じ紫

色花はタカネツリガネニンジン、ミヤマトリカブト、オヤマノリンドウ、タテヤマウツボグサなどがある。黄色の代表はマルバダケブキであり、大形の葉と共にぬっと突っ立っている。これに似た色にはミヤマキンボウゲ、キバナノコマノツメ、タカネニガナ、ウサギギク、ミヤマアキノキリンソウ、ニッコウキスゲ等種類も豊富である。橙赤色系では、まずクルマユリの花が緑の草原の中に点々と混ざって咲いているのが目につく。桃紫色系の花も実に多い。中でもタカネナデシコは花色の変化も多く濃色淡色から時には白色に近いものさえある。これと似た色のものは触らば散らん風情のあるアカヌマフウロである。ミヤマクルマバナも多い。ランの類になると同じ紫色でも趣がずっと異なってくる。ホソバノキソチドリもハクサンチドリも多く、奥床しい感じである。白色はセリ科に多い。イブキゼリ、シラネニンジン、ハクサンボウフウ等があるが、特にオオカサモチの花は偉大である。少し湿った所にはヤマカラマツソウが多く特有の白花を開いている。ハクサンイチゲは雪消えに開くため今はもう枯れそうな葉だけ持った株だけであるが、これの開花の時は壯観であろう。特にエゾイブキトラノオというタデの様な花が多数咲いているのも他には見られない面白いものである。シオガマの一縷に淡桃色と黄緑色との斑のような色が異彩を放っている。見ようによっては白色花の様にも見えるのである。

この頂上のような中性お花畑には白花の美しいチングルマはあまり育たないらしく、山膚の出ている斜面に群生しているのが見られた。クロズルも所々からみついて細い白花をみせている。

杵差岳の頂上付近はこの様に花色、種類共に実に豊富であるから、楽園の讃辞も敢えて誇張とは云えまい。北側へ下ると大小十五六個の池瀧があるがこの辺もまた足を踏み入れるのは惜しい程びしりと咲き誇っている。池の中や周辺にはハクサンスゲ、ミヤマホタルイ、モウセンゴケ、ミズゴケ等が生えている。あまり夢中になって採集していると花と、昆虫の中に埋もれて気が遠くなりそうである。高校生もかような山は始めてなので、疲れも忘れてはしゃぎ廻っている。

三時間近く経って先生は霧の彼方から全身びしょ濡れになって現われた。胴乱の中は一杯になり手にも一山抱えておられる。

早速二人で整理を始めたが雨は止まない。破れ小屋に留まっても意味がないので下山することにしたが、先生の荷は嵩が大きい上に雨を吸って随分目方がかかっていた。泥ねいと化した急斜面を急転直下、転がり落ちるようになっておいたが、その恰好たるや悲惨を通り越して正にナンセンスそのものである。大熊小屋へ戻れば雨は止んだが、翌日も本流が増水で渡渉されず、一日小屋で花と過し、

その翌日には鉾立沢で流されたりもしたが、何とか無理して涉り終へ、五日目に漸く二人は新潟へ帰りついたのである。

越後山岳 第五号

昭和30年8月1日発行

編集発行者 日本山岳会越後支部 新潟市祝町

印刷所 昭和時報社 新潟市西堀通三番町

発売所 学生書房 ¥120

(本誌7ページに越後山岳表紙 写真)